

中世寺社勢力の実力

—室町幕府と禅寺の関係を中心に—

細野 哲弘

独立行政法人 石油天然ガス金属鉱物資源機構 理事長
(元 特許庁長官 元資源エネルギー庁長官)

中世から近世にかけての歴史、とりわけ室町時代後期の史実を追っていると、守護大名と戦国大名の攻めぎ合い、将軍家と戦国大名の駆け引きが頻繁に出てくる。加えて、宗門と戦国大名との確執、ひどい場合には寺院の焼き討ちに及ぶなどの記述にも随分と出会う。とりわけ、信長などの所謂「時代の改革者」の軌跡を辿ると、寺社勢力は守護大名、幕府将軍家などと一緒に一括して「旧弊の代表」とされ、近世の扉を開けるには、「討伐されるべきもの」であったと論述されている。しかし、寺社というのはどんな実態を以って問題とされたのであろうか？

我が国の寺社宗門は、欧州中世の教会・法王の勢力のように、時には皇帝をも屈服させるような世俗の「権力・覇権の頂点」をも凌ぐと云う存在からは遠い。また、教義を巡って宗論争論というものがあったが、異教を殲滅させるような宗教戦争を全国的に展開したというのとも違う。

そもそも我が国の寺社・宗教者は、当初中国との使節の交流などを通じ大陸から文化、思想をもたらし、その日本風の習俗化を図る担い手として機能した。そののちも日々修業を積み、神仏を守り、迷え

る衆生に救いの手を差し伸べることで人心の安らぎを担っていたはずの存在。もっとも、少し時代が下ってからの伴天連・キリスト教のように、時の為政者の政治姿勢の琴線に触れて排除されたものもあったが、戦国時代までの国内寺社には「旧弊」と名指しされ、排除されなければならないどのような直接、間接の実態があったのだろうか？

ところで、最近の歴史界は「室町ブーム」で、幾つかの新著作が注目されている。其々光の当て方の工夫がなされていて興味深い、やっぱりわかりにくい。その原因の一つは、応仁の乱の解説が典型ではないかと思われるが、政局に焦点を当て過ぎているからではなかろうか。足利尊氏から南北朝を経て義満くらいまでは比較的流れが見えるし、戦国大名が伸してくる室町時代末期の展開も別の意味で取り付きやすい。その真ん中の部分、将軍でいうと4代目以降からが分かりにくいのは、まさにその時期の政局に大義名分的な展開がみえにくいからである。

例えば、応仁の乱は、教科書風に言うと、「将軍義教死後の幕府は守護大名の勢力争いの場となり、やがて細川勝元と山名持豊（宗全）を中心とする二



応仁の乱勃発の地/上御霊神社(京都市上京区 この地において畠山政長(管領)と畠山義就(よしなり)が戦端を開き、十余年に亘る大乱が始まったとされる。なお、東西両陣の本拠地は歩いて10分もかからない処にあり、狭い京の中でも「目と鼻の先」である。こんな間合いで、よくも十余年も争ったものだと驚かされる。)

大勢力が抗争するようになった。両派は、8代将軍義政の跡継ぎをめぐる弟義視と義政の妻日野富子の産んだ義尚との争いを中心に、斯波、畠山などの守護大名の跡継ぎ問題などでも二つに分かれ（「もういちど読む山川日本史」より）、京、畿内を中心に十余年に亘って争った騒乱」ということになる。本稿を綴るに際し、改めていくつかの史書に当たってみたが、将軍家から、管領家、四職家、さては守護大名まで含めた勢力争いが複雑に絡み、混乱そのもの。そのうち、例えば、当初細川勝元を頼ったはずの義視が途中から山名宗全につくなど、時々の対立構造を理解するにも一苦労である。そして、双方の首領（総大将）が死没した後も戦いが終わらず、残ったのは荒廃した京の街だけという展開を辿った。

しかし、表面の政局をなぞるのではなく、時代の流れを別の切り口で眺めてみると、案外面白い時代の側面が見えてくる。勿論、すべてを一つの視角だけで整理できるという趣旨ではなく、補助線としての「見立て」が時代の意味を浮き上がらせてくれることがありうるということ。

ここで「見立て」るのは、寺社勢力の宗旨、教義による由縁ではなく、その隠れたる経済的実力のほどが「時の権力者を権力者たらしめるくらいに頼りがい」があり、それゆえに実は時代の基底を支えていたというもの。そして、その影響が甚大で、次代の変革者の目指す方向性と噛み合わない要素を孕むがゆえに、変革者から攻撃の標的となったという設定である。因みに、変革者、具体的には信長であるが、その目指す方向性とは、商工業、貿易、流通の自由な展開に基盤を置いた統一的な天下（社会）を単一の武力秩序の下で実現することである（「天下布武」）。さて、この「見立て」は、果たして冒頭の疑問の解明に首尾よく功を奏するのでしょうか。

話は平安時代に遡る。遣唐使の一員として中国に渡った最澄によって我が国にもたらされた天台宗が

依ったのは比叡山であるが、此処はもともと日吉信仰の地であった。その意味では、この地は古くからの聖地であり、日吉社への信仰に延暦寺という当時最強の仏教の聖地^{パワースポット}が加われば、信仰の源としての地位は抜群であった。

その活動と勢力を支えたのが、荘園、金融と関所収入であった。比叡山は近江の国に多数の荘園を有しており、その荘園から納付される米を元手に「出拳」と称する^{すいこ}粳穀を貸し付ける金融業を営んでいた。こうした金融業は日吉社の頃から営まれており、金利は月8%、年率にすると100%に近い高利であったが、それは暴利とはされなかった。なぜなら、稲作の生産性は高く、^{もみ}粳一粒から育つ稲から100-300粒の粳が付くからであり、古代から普通に用いられたレートであった¹⁾。

加えて、近江国は京と北陸を繋ぐ流通のキーポイントであり琵琶湖はまさにシーレーンと言うべき地理的要衝であった比叡山は湖上関²⁾という関所をいくつも設けて通行料を徴収していた。



比叡山延暦寺（根本中堂 ウィキペディアより）

更に、この粳を媒介した金融的機能は、義満の頃から盛んになった日明貿易による銅銭の輸入により、貨幣を媒介した本格的な金融に発展していった。京において支配的であった土倉、酒屋という金融業は日吉社の神人によるものが源とされる。因み

1) こうした原始的な農耕主体の経済は、一朝天候不良となると金融サイクルが滞るだけでなく、その基礎たる農家の崩壊を一挙に招きかねない。のちに債務者の都合で乱発されるようになった「徳政令」は、本来農家の破綻を回避するためのものであった。
2) 当時、比叡山の支配下にあった湖上関としては、坂本七カ関（「日吉七カ関」、「山門七カ関」とも言った。）、堅田関、日吉松木東関・西関、湖上奥嶋関の11関があった。メインの坂本七カ関は本関のほか導撫関、講堂関、横川関、中堂関、合関、西塔関というように、伽藍ごと仕切りの定まった関所を構えた。関銭は140文であったとの記録があるが、時代により、また荷の量などにより変動はあったものと思われる。

に、こうした金融の原資になったのは、祠堂銭である。祠堂銭というのは、元々は先祖供養のための費用を予め寺院に寄進しておくもので、その永代供養の過程で寺院側の運用として貸し出されるようになった。寺院からの貸し出しは、その趣旨に鑑み高利ではなく、月利2%程度であるが、これを借り受けた土倉、酒屋が利鞘を足して月利8%で貸し出すという構造であった。なお、類似のビジネスモデルは、もう一つの先行パワースポットである奈良の興福寺においても見られるが、それは藤原氏の荘園経営の代行とその余剰の運用から始まっている。

余談であるが、当時我が国は貨幣を鑄造しておらず³⁾、輸入銅銭が唯一のマネー供給源であり、日明貿易は物の輸入よりも銅銭の輸入の方が重要であった。その流入量が今でいうマネタリーベースを規定するという意味で、当時の国内景気に与える影響も格段に大きかった。延暦寺は、ある意味現代の中央銀行の役割さえ担っていたというのは過言ではない。

さて、ここで重要なことは、こうした社会システムの担い手が時代の移り変わりに応じ、また時の権力者の盛衰により変化していったことである。

少しだけ時代を巻き戻してみる。九州博多に聖福寺という禅寺がある。同寺のHPによると「建久6年(1195年)に將軍源頼朝公によりこの地を賜り、栄西禅師を開祖として創建された日本最古の禅寺」とある。



聖福寺(福岡市 博多)

どうして博多に……？ どうして頼朝がわざわざ……？ と不思議に思うのだが、ここに寺社勢力の盛衰の一端を知る鍵がある。禅宗の臨済宗を我が国に伝えたのは栄西であるが、彼は当初九州に赴き宇佐、阿蘇で修行を積み博多に移って布教活動を始めたとされる。しかし、新興宗教の常で、箱崎宮など既存宗門から邪教だとして迫害され、一時布教禁止の宣旨まで出される始末であった。これに対し栄西は敢然と反駁(興禅護国論)をし、禁止宣旨を撤回させて聖福寺の建立に漕ぎつけた。しかし、そこに至る^{あつれき}は当時の九州における対中貿易のヘゲモニー争いの表れであった。箱崎宮は朝廷の息のかかった神社であり、箱崎港がいわば国営の港なら、博多港は民営の港であった。箱崎港からの上りは朝廷に献上されていたが、その利権を博多に依拠した新興禅宗勢力が奪い取らんとする動きがあり、これを裏から支えたのが鎌倉幕府であった。鎌倉幕府は京の権力構造とは距離を置き、鎌倉など関東や九州などの既存勢力と対抗するため、新興の臨済宗を保護し盛り立ててこれに当たらせた。具体的には、必要な便宜を図りながら、領地経営を禅寺に代行させ、その上がりを上納させるという方針をとった。そんな迂遠^{うえん}なことしないで直接武士が徴収すればいいではないかというのはご浅慮というもの。幕府はその設立から暫くは日本各地に地頭を配置することができず、義経追討などを口実に地頭を徐々に配備し、支配力を広げるまでにかかなりの時間を要している。

では、その寺社における経営のノウハウとはどんなものであったのか。前述の興福寺にせよ、延暦寺にせよ、もともと荘園の管理・経営に携わり、金融機能をも果たしていたから、これを司どる担当部署を有していたと考えられるが、此处で登場する禅寺には、加えてこれから述べるいくつかの特色があった。

その紹介に際し、手元にある今谷明氏による「戦国期の室町幕府」という本を紹介しておきたい。氏には他にもこの時代についての沢山の著作があるが、とりわけこの本が素晴らしいのは、奉書と呼ばれる公式

3) 我が国の貨幣は、秩父黒谷で初めて自然銅が発見されたのをきっかけにして708年(和銅元年)に鑄造された和同開珎がその嚆矢(はじめ)である。その後順次皇朝12銭が鑄された。しかし、国内の銅の産出の制約と貨幣流通のニーズの低さから、763年(応和3年)の乾元大宝を最後に、その後国産の貨幣は鑄造されない時期が長く続いた。その意味では中国から輸入された貨幣こそが、当時のマネタリーベースであった。従って、事実上の朝貢貿易であった対明貿易が明の財政に余裕がなくなり衰えると、我が国の国内景気が落ち込むという構造にあった。

文書を始め膨大な古文書を丹念に読み込み、それを通じて政治の動きに潜む経済の動向を探っておられることである。併せて、事案に記載のない数字的なインパクトを関係資料から類推するという作業を、実に綿密にされておられる。以下、本稿での着想も氏の業績からの示唆に負うところ極めて大である。

博多に臨済宗聖福寺が鎌倉幕府の庇護により建立されたことは既に述べた。12世紀の末のことである。その後も臨済宗は幕府の保護を受け、次々に寺院を建立していった。その典型が鎌倉五山⁴⁾である。幕府は政争、戦いのたびにその勢力下に入った荘園・領地を御家人に分ける一方、その一定のものを寺社領に組み入れるとともに、自らの領地の管理をも禅寺に委ねた。幕府機能の重要なもののひとつに、所領の安堵、領地紛争の司法的裁きがある。問注所がそれに当たったが、確定された所領の経営自体には、武士よりも寺社の司の方が長じていた。

室町時代に至ると、政治の中心となった京にも京都五山⁵⁾と称する十指に余る禅寺が建立され、禅宗の最盛期を迎えた。南北朝の動乱を経て、従来の荘園は、「半済地」として武士が横領したりして様変わりの再編が進んだ。その間、大和、畿内の二大勢力である興福寺、比叡山がかるうじて所領を維持した一方、五山の荘園は幕府の支援により増加の一途をたどった。とりわけ注目すべきは、禅寺が、自らの

荘園だけでなく、旧仏教系の南都興福寺や比叡山、更には真言宗醍醐寺のいくつかの荘園の管理人（徴税担当官）をも請け負っていることである。とりわけ興福寺は五山を忌み嫌い、寺院の奈良への進出どころか臨済宗の僧の入国さえ許さなかったが、その興福寺でさえ五山の荘園経営能力には一目置かざるをえなかった。

この時代の荘園経営に係わる文書に「東班衆」という用語が頻繁に出てくるが、これは禅僧のうち、寺院の経理、財務や荘園管理を担う職能集団のことであり、主に宗教活動（教学、修行、布教）を担う「西班衆」と対比される。いわば前者が会社の総務・経理財務部門、後者が（宗教の）営業・事業部門という感じであろう。管理する荘園の増大、金融的な活動の拡大とともに、この東班衆が寺院の中で重きをなしてくるのは、極めて「金融資本主義的」である。東班衆の中には、担当する東班衆の禅僧が私有の資産さえ抱えている者がいた。東班衆の序列は、都管を頂点に、六知事（都寺、監寺、副寺、維那、典座、直歳）と称する職階がある。この上位者である都管などには、公私混同の悪辣かつ苛斂誅求な徴収と資産運用の度が過ぎて、徴収される側の恨みを買って暗殺の対象になる者さえ現れている。

そして、その影響力の度合いであるが、前述した今谷氏の著作によれば、天龍寺一寺だけで31か所の荘園から米と銭を併せて年間8100貫文（1貫文＝



南禅寺（京都市左京区 京都五山別格 写真は山門と法堂）



4) 「鎌倉五山」とは、建長寺、円覚寺、寿福寺、浄智寺、浄妙寺をいう。

5) 「京都五山」とは、「五山十刹」とも言い、五山の上の別格寺たる南禅寺を筆頭に、天竜寺、相国寺、建仁寺、東福寺、万寿寺の「五山」、等時寺、臨川寺、真如寺、安国寺、宝幢寺、普門寺、広覚寺、妙光寺、大徳寺、龍翔寺の「十刹」からなる一連の寺を指す。それぞれに諸山、末寺を抱え、ネットワークで繋がっていた。

1000文)という年貢を徴収していたとある。仮に他の五山(プラス南禅寺、以下同じ)が同等の収納力を有していたとして、五山全体で5万貫文となり、その延長で推計すると8~900か所の荘園を有するとされた十刹、末寺まで加えた総計は80万貫文を超えると推計される。先に述べたように当時の金利の年100%を用いてフローとしての80万貫文を割り引けば、その80万貫文はそっくり資産価値と言える。当時の石高との換算レートは一石が0.5貫文程度であるとする、五山全体で約8~10万石、十刹、末寺まで入れると、おそらくその数倍、またはそれ以上の規模になりうる。これは大変な額であり、皇室直轄領の8千石はおろか、比叡山延暦寺の6万石を遥かに凌ぐ大きさにみえる⁶⁾。

更に、訴訟の裁きにも触れておきたい。武家政権における領有権争い、或いは徴税権の帰属をめぐる争いの裁きは、幕府の威信と社会秩序の維持に極めて重要であった。鎌倉時代の問注所、室町時代の評定衆引付において処理されたが、この間の記録を見ると訴訟人に禅宗の代理人が頻繁に登場する。凄腕、強引な東班衆のやり方は周辺との争いの原因になって被告に据えられたし、東班衆が訴えを起こすことも少なくなかった(「境争論」と称した)。その記録を見ると、東班衆側の勝訴率が著しく高いことが注目される。それもそのはず、裁くべき立場の司に五山の息のかかった幕府の担当が就いているのである。時期によっては裁決書(奉書)を出すにあたり、五山最頂の将軍が直接訴訟指揮をとる場合もあった。いわば裁判所と五山関係の訴訟人とが「グル」になっているのである。これには土倉などの有徳人⁷⁾だけでなく、他の宗教勢力、公家なども多数被害にあった。

こうした「もたれ合い」により五山など禅寺の経



相国寺(京都市上京区 相国寺は五山序列2位で、五山文学の中心であった寺。写真は法堂)

済力は強大なものになっていったが、その見返りに、禅寺は室町幕府の歳費を陰に陽に賄うという関係が見て取れる。室町将軍の行動を追ってみると、頻繁に禅宗寺院へ参詣していることが目に付く。相国寺鹿苑院⁸⁾の事務のトップであった季貞真蕊の公用日誌である「蔭涼軒日録」を読むと、どの将軍がいつ何処の寺を訪問したかなどの記述が克明に残されている。

こうした頻繁な将軍渡御は、それを根拠に「幕府の政治の重心が文化、宗教方面にあり、室町幕府の性格は貴族的、公家的であった」と性格付けする向きがある。確かに将軍義教、義政などは幕府御所にいるよりも社寺仏閣にいる方が多いと言われるほど政務に腰が入っていなかったとの評価があるのも事実だが、その解釈は一面的にすぎるであろう。仔細に施政記録を辿ると、将軍の寺院訪問の前後にはまとまった普請など幕府負担の歳出事業があり、渡御の際には寺院から都度ごとに幕府への多額の寄進の記録が残されている。いわば将軍の訪問はその趣味嗜好によるというだけでなく、宗教的儀礼的な装いを借りた必要資金確保のための営業活動でもあったのである。上述の「蔭涼軒日録」には献上の金銭の

6) 当時の数値を比較したり推計することは極めて難しい。ここでの数値は荘園領地からの上りをベースにしているが、寺領分と他の荘園の代官請け(通常2割が手数料と言われる)の区分も定かでない。五山の関係では、ネットワークの中で上納分がダブルカウントになっている可能性がある。一方、比叡山の6万石というのは、鎌倉末期の記述以外に信頼できる数値がなく、これも直轄寺領のみで、園城寺はじめ系列分はカウントされていないし、湖上関からの収入も含まれていない。しかし、五山の収益力が他を圧倒していたのは間違いないだろう。

7) 有徳人とは、中世の富裕層のこと。領主的に身分の高い層ではなく、貨幣経済の発展とともに富裕となった新興の層を指す。有徳とはもとは仏教用語であるが、「徳」が音として「得」に通じることで、得を得る行為を貪欲と捉えられないよう積極的に寺社に喜捨したところから、商人たちを「有徳人」と呼びならわすようになった。

8) 相国寺の鹿苑院は五山全体の住持つまり寺の住職の任命権を持つ塔頭で、禅寺統制の要であった。当然に全国から銭貨が集中し、禅寺全体の財務管理をも束ねる機能も持つに至った。そうした事務を司る部屋として蔭涼軒というものが置かれ、その軒主は五山ひいては幕府の運営に重きをなした。



鹿苑院遺跡（相国寺の伽藍の佇まいは当時よりも小規模になっている。鹿苑院は現在の相国寺境内にはなく、今は同志社大学の敷地になっている一角にその塔頭があった。現在その場所には大学の施設（良心館）が建っているが、建設に当たった発掘で発見された鹿苑院の礎石と考えられる遺跡が、当該施設の一階フロアに埋め込み展示の形で保存されている。また、当時の鹿苑院敷地図のパネルも同施設のロビーに展示されている。いずれも、学生が学び舎の過去の白くに馴染む良い趣向と拝察した。さらに、発掘された「鹿」の字を焼いた陶器の破片（写真はレプリカ）が同大ハリス理化学館に展示されている。鹿苑院敷地図は「同志社大学歴史資料館調査研究報告第13集 相国寺旧境内発掘調査報告書 今出川キャンパス整備に伴う発掘調査 第4次～第6次2015 資料編」に典がある。これは、同資料の中の相国寺所蔵「江戸期に相国寺から薩摩藩に同藩邸を造営するに当たり貸与した土地区画」を示す図に載っている。こんなところで薩摩藩の名前が出てくるのが、いかにも京都らしい。また、写真は夫々良心館、ハリス理化学館の中の展示物を筆者が撮影をしたものである。なお、一連の資料や遺跡内容の問い合わせに対しては、同志社社史資料センターの小枝弘和博士に懇切にご案内頂いた。ここに付記してお礼に替えたい。）

高、献上物⁹⁾の種類、数量が詳細に記されているが、注目すべきはそうした金銭の管理、献上物の保管、更にはその売却による換金などが相国寺の東班衆のもとで処理されていることである。

先に、陰に陽に幕府を支えていると書いたが、ここまで関係が密であると、禅寺である相国寺と幕府はそれぞれ別にあって協力しているというより、幕府、特に將軍の公私の財務機能が禅寺にビルトインされていると言っても過言ではないであろう。言わば、禅寺は幕府の財布機能なのである。事実、幕府直轄領の管理も禅寺が担った（これを「代官請」と称した）。幕府の財政が逼迫すると、遂には最後の手段として五山からの借銭も恒常化し、その財布機能性は益々強まった。そして、ここまで密着性が高まると、些か品のない慣例まで横行するようになった。室町時代には、五山の寺持ち、即ち住職になるには幕府が発行する公帖^{こうじょう}という住持職補任状が必要であった。そしてその交付の見返りに一定額の銭貨を幕府に収める慣わしであった。幕府の財政が逼迫するにつれて、幕府はこの収入を増やさんと意図的に住職の任期を短縮したり、極端な場合は座公文^{ざくもん}と行って実際に赴任しない僧に公帖だけ発行して資格を与えるということまで行われた。呆れたやり方だが、僧においても容易に肩書に箔^{はく}が付き出世ができるとして、双方にwin-winの関係が成立し平然と行われた。

更に、幕府の対明外交文書の処理や国内紛争の事後処理の軍事使節にも東班衆が起用されるなど、幕政における五山の存在感は財務管理、会計領域を超えて圧倒的なものとなっていった。

ここまで縷々^{るる}五山禅寺の伸長を記してきたが、こうした幕府との関係は、一朝一夕には確立されたわけではない。五山の影響力が伸びるに従い、既往勢力、とりわけ比叡山延暦寺との確執は熾烈を極め、様々な形でヘゲモニー争いが展開された。天龍寺落慶法要における延暦寺の強訴事件（1345年）南禅寺楼門事件（1367年）など¹⁰⁾がそれである。日枝神社の神輿^{みこし}を繰り出しての遣り取りなど、社会風物詩的

9) 上納される品物としては、小袖、漆塗り盆、段子などの工芸品のほか、高壇紙、杉原紙のような紙が記されている。当時の贈答品としての紙の価値が窺われる。

10) 天龍寺落慶法要における延暦寺の強訴事件とは、朝廷を巻き込んだ位取りの争い。禅宗の天龍寺の完成式典に天皇が行幸するのに比叡山側が異議を立て、結局行幸中止に至らせた事件。南禅寺楼門事件とは、五山と比叡山との面子をかけた騒動。もともとは南禅寺の関所を比叡山側の園城寺（三井寺）の小僧が関銭を払わずに通ったところこれを咎められて殺傷されたのがきっかけ。園城寺がこれに報復し、南禅寺の関所を破壊して禅宗僧侶を多数殺害に至った。南禅寺側から園城寺の成敗を願い出られた幕府は、山科付近の園城寺莊園を焼き払い、その領地を没収するという沙汰に出たところ、これを不服とした比叡山が全面的に園城寺を支援するとともに、旧勢力の興福寺をも巻き込んで31か条の五山糾弾の申し入れを幕府に提出するに至った。本件は、幕府を巻き込んで紛糾し、最後は造ったばかりの南禅寺の楼門を破却するという形での妥協的解決が図られた。園城寺と比叡山とは同じ天台宗でも普段は仲が良くないのであるが、こうした五山との対立となると、旧勢力の利益のために大同団結した。

にもエピソードが多いが、ここではその詳細には踏み込まない。大事なことは、北陸地方に荘園を多くを有する五山と、シーレーン近江を抑え、年貢運搬のネックに睨みを効かせる比叡山延暦寺とは、自から利害を対立させる宿命にあったという点である。幕府の五山への肩入れは、時の將軍や管領の政治的思惑により濃淡があるが、訴訟や対中貿易、国内物流への諸々の便宜などを梃子にしてジワジワと五山の勢力が伸長した。

比叡山は、室町幕府との関係では一旦は宗門の第一人者たる地位を五山に譲ったが、以後もその勢力をしぶとく維持した。だが、この時期に比叡山に不運であったのは、のちに信長による凄惨な焼き討ちを被るより前に、二度に亘って幕府から焼き打たれたと同様な仕打ちを受けたことである。意外に知られていない事実だが、ボディブローのように宗門としての体力を削がれていった。1回目は將軍義教によるもの（1435年）。義教は元々比叡山系の青蓮門院門跡であったが、その出身にも拘らず比叡山とは折り合いが悪かった。また、彼は將軍家の跡目を籤で継いだ経緯¹¹⁾から脆弱と認識された基盤を強固にしようとする意向が人一倍強かった。ところが、比叡山がこれに執拗に抵抗したうえ、鎌倉公方の足利持之と共謀しているとの嫌疑などが持ち上がって対立がエスカレート。結果、根本中堂を焼く事態に至った。2回目は管領家細川政元によるもの（1499年）。政元はオカルトじみた奇行で知られるが、將軍跡目をめぐり問題で比叡山と衝突し、主要僧侶を集団切腹に追い込み、貴重な文物とともに根本中堂を焼くに任せた。

五山と幕府との間に確立した関係は「蜜月」とも言いうるものであったが、さても、このような五山

禅寺の「この世の春」にも遂に転機が訪れる。

その引き金はまさに応仁の乱であった。この戦乱により五山各寺は壊滅的な物理的打撃を被り、東班衆の事務基盤が壊滅した。そうしたことに加え、幕府と守護大名との政治バランスが変化し、これを背景に、それまで五山が享受していた管理荘園への国司などの不入の権、関所の自由通過権などの特例が剥ぎ取られていった。

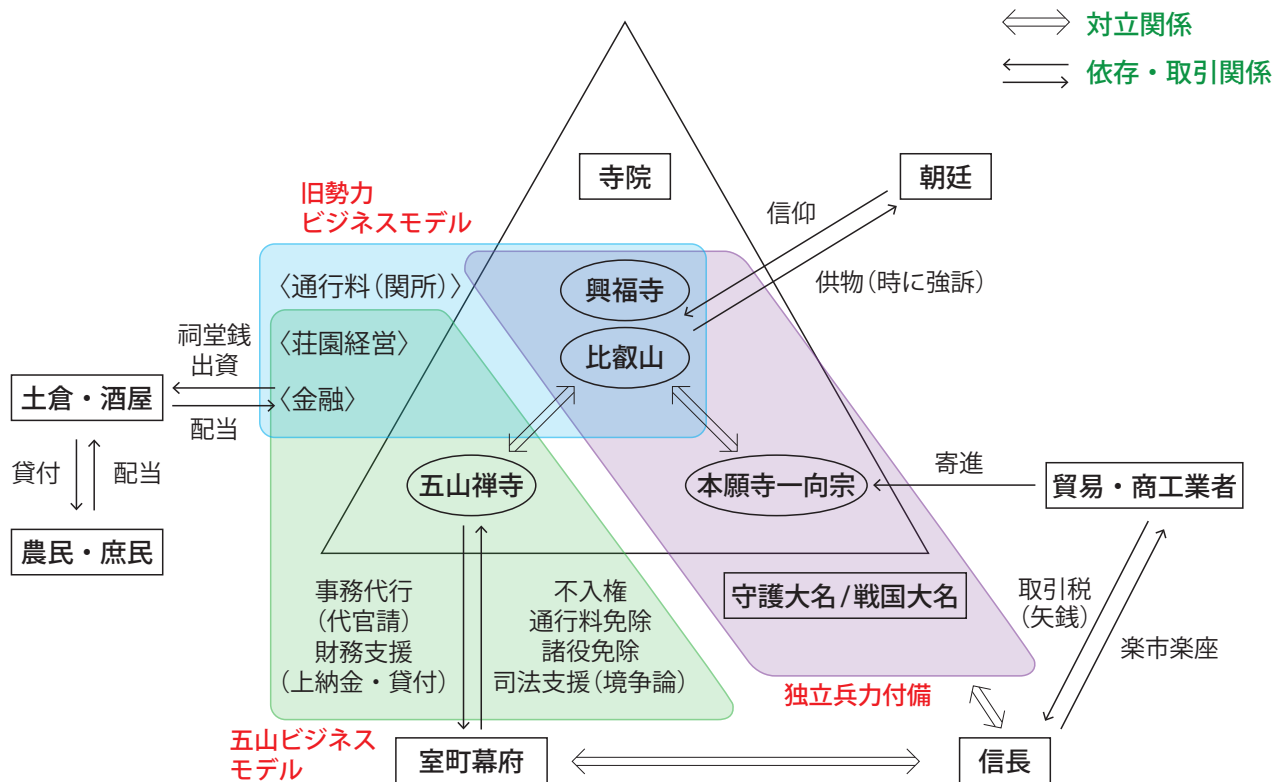
東班衆が去り管理者を失った領地の管理については守護大名を中心に配下の国人などに管理を任せる「守護請」が多くみられるようになっていった。これが国人達の実質支配を許し、下克上の素地を作った。彼らは、五山のように裁判手続きを通じ領有権を篡奪するような手間暇かけることはせず、腕にモノを言わせて実力で支配していった。

一方、こうした五山勢力離れから空白地となった北陸の地には一向宗が進出していった。一向宗は近江の地で誕生の後、既存勢力、主に比叡山から数々の迫害を経て各地を転々とし、漸くにして越前吉崎での興隆に至り、最終的には石山本願寺に本拠を置いた。特徴的なのは、信者からの寄進によってのみ教団を維持するという方式をとったことである。その意味では延暦寺、五山禅寺とはビジネスモデルが異なるが、信者は農民層だけでなく新興の商工業者に及び近世的な新たな担い手に支持を挙げた上に、自己完結的な軍事勢力として半ば独立国のような外観を呈した。そしてそのことが自由な流通を梃子にして貿易と商工業者の振興を目指した信長の琴線に触れた。やや時代が前後するが、応仁の乱のあと事実上の幕府支配者となった細川政元は、一向宗を金銭の上納者ではなく兵力の提供者として扱った。その意味でも信長からは、以前ほどの勢力はなく

11) 籤での將軍選びを演出したのは、真言宗醍醐寺三寶院門跡の満濟である。幕府4代將軍の義持は寵愛した息子の義量（よしかず）に將軍の座を早々に譲ったが、義量が19歳の若さで在位2年足らずで死去したため、再度將軍となった人物。ところが、再登板して3年後に急に病没したため、候補者4人（いずれも義持の弟）のいずれにするかという將軍の後継問題が浮上した。誰を選ぶにせよ後顧の憂いが残ることが懸念され、そこで義持の側近であった満濟は、義持の遺言と称して強引に岩清水八幡の神前で籤を引くことで將軍を選ぶという差配をした。その結果、選ばれたのが天台宗青蓮院門跡義圓（ぎえん）、還俗してのちの義教である。義教は、將軍となってからは随分と専横を尽くしたが、満濟にだけは終生頭が上がらなかったとされる。なお、密教の室町幕府との関連は、本稿の趣旨に鑑み此処でそれを紹介することはしないが、主に朝廷と幕府の仲立ちとしての役割から特別のものがあった。満濟は「將軍門跡」、「黒衣の宰相」と称され、准後の称号が許されるほどに幕府の施政に影響を持った。その「満濟准后日記」は室町時代の施政記録として貴重なものとされている。



真言宗醍醐寺三寶院（京都市伏見区）唐門



「権門経済システム」概念図

なったものの依然として抵抗をやめない比叡山延暦寺と並んで、一向宗は武力勢力としても看過できない存在に映った。

ここで一向宗と信長との死闘や信長の覇権成立の過程を追うことは、本稿の趣旨の外である。冒頭の疑問に戻ると、事の核心は、「権門経済システム」とでもいうべき特殊な「権力と経済主体とのもたれあい関係」にあった。時々の政治勢力の庇護を受けながら、経済的利益を享受し、その見返りに政治勢力に一定の経済支援をするという仕組みに、寺社勢力が隠然たる関与をした。そして、ある場合には武力をも背景に、とりわけ近世のキーである貿易、流通にまで影響を及ぼした。そしてその自由度と画一性を阻害したがゆえに、寺社勢力は信長など改革者の「目の敵」にされたのである。

さて、そのように書くと、禅宗勢力は信長などの改革者の「成敗の対象になってなんかいない」のではないかとの印象を持たれる読者もおられよう。

確かに、攻撃され、排除されたのは、依然として兵力を伴う勢力を維持した比叡山であり、一向宗であり、足利幕府、守護大名であった。禅宗はそれ以前に勢力としては自壊してしまっており、変革期の対抗プレーヤーでないようにみえる。

しかしながら、禅宗は、応仁の乱以後にその伽藍の崩壊とともに急速に影響力を失墜させたものの、それ以前の幕府への影響力の故に、その衰退は各地の経済的支配の空白を生じさせた。領地支配の力学をシフトさせ、まさに下克上を含めて守護大名の戦国大名化を促した。また、一向宗という新たな勢力の伸長を誘った。その意味で、戦国大名と一向宗をして軍事力と経済力を有した勢力となさしめ、近世の統一秩序への移行を阻む存在としてクローズアップし、次の変革者の登場を用意したのである。

その観点でいうと、武家政権下、主に室町期における禅宗の役割は、権門の実質を官僚的に支えつつ、自らの崩壊によって支配構造を流動化させ、近世への脱皮の桎梏となる主体を集約し、浮き彫りにするというユニークな触媒効果を果たしたのである。